2022_7_24～26 付

検証ほつまつたゑ 121 号　ハタ考　その2 | NAVI 彦　～つつがなき神さまめぐり～ (ameblo.jp)

https://ameblo.jp/navihico-8/entry-12750727886.html

上記のアドレスより転記した。
　なお、紙面の関係で、写真、段落は、大きさ、段落を変更してあります。

NAVI 彦　～つつがなき神さまめぐり～

左欄 （Web より添付の情報）

右欄 （筆者コメント）

神社めぐりをしています。
その土地ならではのお話も、
さくっとまとめてます。

← まとめています。

山背国の東寺めぐり②…

検証ほつまつたゑ 121 号　ハタ考　その2

2022-06-28 21:13:01

テーマ：検証ほつまつたゑ

『検証ほつまつたゑ　よみがえる縄文叙事詩』
という

ホツマツタヱ研究同人誌の第121号（令和4年6月号）に掲載していただきました！

最近は、こちらの検証誌の

〇豆知識
　ホツマツタヱには、シナ（支那）より渡来した秦氏のことは、記述されてない。と云うか、時代が違うのである。

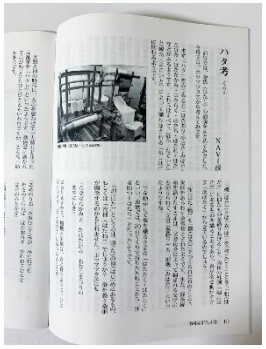
　ホツマツタヱの時代は、紀元前 1000 年頃（縄文時代後期）～紀元 262 年頃（古墳時代前期）である。

　それに対し秦氏の祖先は、応神天皇 14 年（西暦 341 年頃）に帰化したである。

編集者会議にもオンライン参加させていただき
貴重なお話をうかがっています。

とてもとても
濃密な時間を味わっています🌈

ありがとうございます☺✨



さて、今回は
前回の『ハタ考　その1』の完結編になっています。

『検証ほつまつたゑ 120 号①　ハタ考　その1』『検証ほつまつたゑ　よみがえる縄文叙事詩』という ホツマツタヱ研究同人誌の第120号(令和4年4月号)に掲載していただきました！　今回は、記念すべき創刊20周…　ameblo.jp

〇豆知識・秦氏
　『日本書紀』で応神天皇 14 年に百済より百二十県の人を率いて帰化したと記される弓月君を秦氏の祖とする。
　平安時代初期の 815 年に編纂された『新撰姓氏録』によれば「秦氏は、秦の始皇帝の末裔」という意味の記載がある。

〇秦
シナ(支那)の辞書
・「ハタ」と読む言葉は辞書にない。

・シナ(支那)の発音は、「tai」である。
・意味は、やすらかな等。
　tai クニの略称。
　tai 性。

漢和辞典
・「ハタ」と読む言葉は辞書にない。
・漢和辞典は、「ジン(呉国)」、「シン(漢国)」 と読む。
・意味は国、王朝名。
・観智院本の古訓の読みに「ハタ」名がある。

謎の古代氏族・
秦氏（はたし・はたうじ）
をホツマツタヱから読み解きます！

ハタ考　その2

前号では、
秦氏の通説をまとめてみました。

今号では、
ホツマツタヱから考えてみます。

　まず、
「ハタ」をみてみると

**「はたおり　やはた　みはた　たはた　はたたかみ
はたらく　はたち　はたれ　はだ」**

などがあるようです。

これらはすべて、
経糸（たていと）と
緯糸（よこいと）によって
織りなされる

「布（は）」に関わるようです。

【機織り機（道の駅・近江　母の郷）】

（注記）観智院
　室町時代の1359年に、真言宗の学僧であった杲宝によって創建されました。

まとめ
　シナ（支那）、漢和辞書では、秦を「ハタ」と呼ばず、「シン、ジン」と呼ばれていた。
　だが、渡来人の秦氏は、日本国内の815年、1359年以前に秦（ハタ）と呼ばれることになった。
　その由来を大辞林より推測すると、『秦氏は「養蚕」、引いては、「織物」』の技術を持って渡来したと伺える。

大辞林（辞書）
・はた【秦】
姓氏の一。
　漢氏と並ぶ古代の新羅系渡来氏族。
養蚕をはじめ鉱山開発、灌漑・土木事業に従事した。
山城国葛野郡を本拠に、近畿一帯に広く住み、平安京の建設にはその財力が大いに貢献したといわれる。

「機(はた)」とは
「衣(は)」を「栲(た)く」ことで、

「肌(はだ)」に似たものを織りあげること、

肉体の外側
「端(はた)」にあるもの織ることであり、

鳥が羽を動かすさま
「羽ばたく」からきているのでしょう。

「旗(はた・幡)」も「機(はた)」でつくられた布のことで集団をあらわす象徴物とされたようです。

また、
経糸緯糸を織りなすさまは父音母音によって編まれる文字にも例えられて

文書(巻物？)も「御機(みはた)」といったようですね。

手を動かして機を織るさまを「はたたく・はたらく」といい、

連歌では
20首くくりで折りたたむことから「端を断つ＝はたち」となったようです。

「畑(はた)」というのは、田(た)の初(はじ)めにあるもの

もしくは
「衣種(はたね)」でしょうか？

ホツマツタヱより、

〇「ハタ」の語句見ると、ハタ(機)、ハタ(幡)、タナハタ(七夕、棚機)からなる語句が、糸の経糸と緯糸を駆使した織物が語源と云うことがわかる。

ハタ(機)
・オリハタ
・タクハタ
・ミハタ
・ハタオレズ

ハタ(幡)
・ヤトヨハタ
・ヤヱガキハタ
・ヤトヨハタ
・カグヤハタ
・ヤハタ
・ヤトヨノミハタ
・シラハタ
・ヤモトハタ
・ヤイロハタ

タナハタ
・七夕
・棚機

他の下記の「ハタ」は、直接、機、幡の語源と結び付かず、今後の研究が待たれる。

ハタレ
・凝り得て六のハタレ

蚕を養う桑畑が関係するのかもしれません。

ホツマツタヱにも

**『たなばたかみと　たはたかみ　おなじまつりの
あやにしき』**

とありますから、

棚機と田畑は衣と食のようにひとびとのすぐ
「傍(はた)」にあったようです。

天照大神の時代に、人心を惑わせて
一大勢力となった反乱軍を**『ハタレ』**といったようです。

動物霊に憑かれて心がねじけたひとびと

ともいわれますが

こんな一節もあります。

『よこしまの　はたれとなるぞ』

「ハタレ」とは
「邪(よこしま)」なものだそうです。

ハタラ(働)キ
・立ち働き
・働く手

ハタ(畑)
・田畑

ハタタ(霹)
・霹雷

ハタル
・督促る

ハタチ
・二十歳
・二十年

ハタシ
・裸足

ハタキ
・叩き

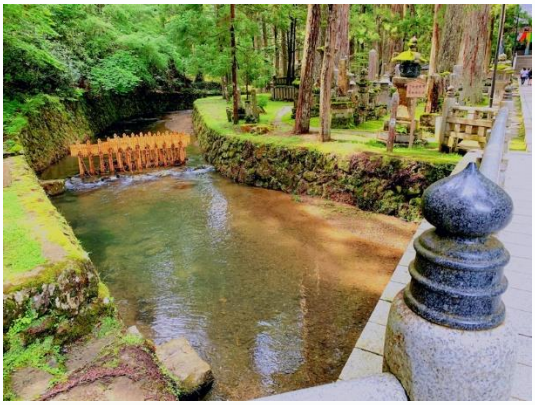
ウスハタ
・碓端

ハタノツルギ
・肌の剣

ほかに
「よこま・よこが」ともいいます。

「よこ」とは
「横(よこ)」のことで

機織りのさいに、緯糸が通らず
布がひき攣ってしまうことをいうようです。



【高野山の玉川】
(ハタレのヲシテを納めた地か？)

『あめのりお　たみひとくみが
みたれても　をさめくらねば
はたおれす　かれおさむるは
はたのみちかな』

天照大神は、
治政を機織りに例えていた
といいます。

経糸を
「天の教え(法律)」
として、

緯糸を
「民(ひとびと)」

〇それにしても、
左記の文章の 4 頁の
『「機(はた)」とは
「衣(は)」を「栲(た)く」
ことで、』以降の文章
は、面白いですね。

　ほとんどが、ダジャレと現在、存在するものの組み合わせで解説されているようです。

　また、ホツマツタヱを読むと記述される内容は、解説は不用と思わる。

解説文は、
ホツマツタヱや辞書を駆使し、「うんちく」の解説して頂けると更に読み易いのですが。

うんちく談
　秦氏の出城は、ホツマの「ハタ」との関係を調べなくても、辞書の解説より解説ができる。

としていたようです。

そして、
糸をおさえて整える
「筬(おさ)」から

各地でひとびとを束ねるものを
「長(おさ)」といったようです。

←〇「オサ」は、ホツマに解説あり。

緯糸が1組でもうまく通らなかったり
筬でおさえて整えなければ

たちまち布が乱れてしまい
機織りがうまくゆきません。

それはつまり、
民の心が乱れて
ひとりでも、一戸でも、一村でも
法律にそむくものが現れれば、

やがておおきなうねりとなって
国の治政そのものに
悪影響をあたえるということだそうです。

だからこそ、
ひとびとの暮らしを整えたり

長との連携をとることを
「治(おさ)める」といい、

すべては
機織りに通じているのだといいます。

←〇『「ハタレ」とは、「機(はた)」の「乱(みだれ)」をひき起こすものということでしょう。』とは、意味不明。

つまり「ハタレ」とは、
「機(はた)」の「乱(みだれ)」を
ひき起こすものということでしょう。

緯糸であるひとびとを惑わせて、
布(治政)に皺(しわ)や
縞(しま)を描いて乱すことを
「よこしま」といったようです。

←○「邪」は、辞書に
解説あり。

ハタレのうち
「キツネ(狐)」が憑いたとされる
『キクミチ』の一団は、

←○「キツネ」は、ホツ
マに解説あり。

九州・筑紫で蜂起すると
京都・花山に集結したといいます。

頭目は、
3兄弟だったことから

『ミツキツネ』といわれたようです。

花山を治めていた
『カダ』は、

←○「カダ」は、ホツ
マに解説あり。

「ねずみのあぶらあげ」をつかって
鎮圧したといいます。

「キツネ」は
「東西北(きつね)[朝夕夜]」

に通じていて、

夜行性ですから
「北(ね)[夜]」に住む
「ねずみ」をあげる(明ける)ことで

夜(心の暗さ)を照らし
活力をうばう意味があったようです。

「ねをあげる」の語源
かもしれませんね。

【花山稲荷神社】

キクミチは魂断ち(処刑)をいいわたされるのですが、カダは何度も食い下がって恩赦を願ったといいます。

すると、
カダの祖先『ウケモチ』を祀らせるという条件つきで刑をまぬがれたそうです。

←○「ウケモチ」は、
ホツマに解説あり。

これが、
伏見稲荷大社や花山稲荷神社のはじまりのようです。

「お狐さん」が「神の使い」とされるのはこれによるようです。

ウケモチやカダは、花山の地で先進的な**農業を研究していた**といいます。

「稲荷」とは
「稲がなる」という豊穣のことで

カダはのちに
「荷田氏」となったことから「荷」の字がはいるようですね。

【伏見稲荷大社境内の東丸神社】
（荷田春満を祀る）

伏見稲荷大社に奉斎したのが
秦氏（はたうじ・はたし）です。

秦氏も
機織りに縁があるといいますし

荷田氏との関係も深いことから

京都の秦氏はキクミチの末裔かもしれません。

カダの治めた地は、のちに「葛野(かどの)郡」となったようです。

秦氏の本拠地「太秦」もここにあります。

秦氏がはじめに流入したのは奈良の「葛城」といわれ

拠点の掖上には「葛(くず)」という地名もあります。

淀川の治水を行った地も「交野(かたの)」です。

秦氏が渡来したのは第15代・応神(おうじん)天皇朝だといいますが

応神天皇の出生地とされる
宇美八幡宮の地も
「蚊田(かだ)」と
いわれていたようです。

天照大神は
桑から琴をつくって
ハタレを討った秘策から

←〇「秦氏はキクミチの末裔かもしれません。」とする根拠が不明。

『カダ(葛)
フキ(蕗)
カナデ(奏)
メガ(茗荷)
ハ(葉)
ヒレ(領巾)』

と名づけた
6つの弦を張ったといいます。

ここにも
「ハタ(秦)」と「カダ(葛)」の関係がみられるようです。

「カダ」とは
「タカマ(高天原)」と対になる語句だったのかもしれません。

←○『「カダ」とは「タカマ(高天原)」と対になる語句』とする根拠が不明。

フトマニ図からみれば
「タカマ」は

「タ」と「カ」の「間(マ)」にある「中心円(アウワ)」のことで、ミナカヌシの教えをさすようです。

←○『「タ」と「カ」の「間(マ)」にある「中心円(アウワ)」のことで、ミナカヌシの教えをさすようです。』とする根拠が曖昧。

ヒタカミにタカマがあったことと整合性がとれない。

「カダ」は、「タカ」の反対ですから

「光(カ・ひかり)」を「堕(ダ・おろす)」

タカマ(朝廷)の教えをひとびとに伝える
という意味があったのかもしれません。

トホカミヱヒタメの配置からみれば、
「カ」と「タ」は西と東の関係にあります。

「キツネ」も
「ネ」をあげてしまったので
「キツ(東西)」となり
「カダ(西東)」に通じます。

←○『「カダ(西東)」に通じます。』の意味不明。

西東はツキでは?

「東西」とは、
「緯糸」のことです。

カダがキツネの恩赦を願ったのも「緯糸」である
「ひとびと」をともに導くためだったのかもしれません。

←○『カダがキツネの恩赦を願ったのも「緯糸」である。』とする意味不明。

『よこまほろぼす　はたのぬき』

乱れた緯糸をとりのぞくことを
「機の抜(ぬき)」といったようですが

カダとキツネには、
緯糸をしっかりと張る
「貫(ぬき)」という
意味もあったのでしょう。

ハタレの残党は朝廷にくだり
『ハルナハハミチ』が頭領となって
政治にも関わっていたようです。

ハルナには独特の
「訛り」があります。

方言なのでしょうが、もしかすると
海外から渡ってきたのかもしれません。

以前に、
「カグツチ考」で

ハタレの乱は
天照大神を皇統とするものと
ソサノヲを皇統とするものの
争いだったのでは？
という話をしましたが
『検証ほつまつたゑ 119 号　カグツチ考　その2』
『検証ほつまつたゑ　よみがえる縄文叙事詩』という、 ホツマツタヱ研究同人誌の第119号(令和4年2月号)に掲載していただきました！　本当にいつも、ありがとうご…　ameblo.jp

←〇ホツマツタヱには、『ハタレの乱は天照大神を皇統とするものとソサノヲを皇統とするものの争いだったのでは？」と、書かれているが、もう、創作の域だね。

ソサノヲは放浪のさなか
朝鮮半島に渡っていた という
伝承もあるようです。

また、力の尊は
中国大陸で王朝を開いた
といいますから、

トホカミヱヒタメの子孫は
世界に散らばっていたともいうようです。

だとすれば、ハタレとは
母国の後継者争いに参加した出戻り氏族だったのかもしれません。

【大酒神社の石碑】

国の傍(はた)である
大陸から渡ってきた人々を、

人心を惑わすハタレといったのでしょうか？

←〇ウンサン臭い説には、疲れるね。この説が検証ホツマに掲載されたの？

第29代・欽明(きんめい)天皇に取り立てられた
秦大津父(はたのおおつち)は

伊勢の帰りに
2匹の狼の命を救ったことが
出世のきっかけになったといいます。

「狼」とは「大神」のことで
「天照大神」と「ソサノヲ」のことであり

ふたりのあいだで揺れ動き
国や朝廷に仕えた

「ハタレ」の末裔こそが
「秦氏」である

と言っているのではないでしょうか？

←○『「狼」とは「大神」のことで「天照大神」と「ソサノヲ」のことであり』とは、根拠無き暴論。

←○『「ハタレ」の末裔こそが「秦氏」である』とする根拠不明。

【花山稲荷神社の狛狐】

ウケモチ・カダの一族は
農業を担うことで、
ひとびとの生活を守っていたようです。

天照大神は、
ひとびとに寄りそう存在の統括を
弟・ツキヨミに任せようとしたようですが

ツキヨミはあやまって
ウケモチを殺してしまい
政界から追放されてしまいます。

『YouTube めぐり⑭　ツキヨミ』YOUTUBE 動画の第14弾です。今回は、ワカヒメさまにつづく日本神話シリーズです。

天照大神の弟であり、イサナギ・イサナミの第4

子である『ツキヨミ（月読尊）』…　ameblo.jp

カダは、ウケモチや
ツキヨミの仕事を継ぐだけでなく

蚕の糸をつむぐ方法まで伝えたことから
『ヨヨノタミ　マモリツカサ
（代々の民　守り司）』
と称えられたそうです。

ひとびとの生活を守る存在といえば
『キツヲサネ・アミヤシナウ』の
神々がいらっしゃいました。

かれらの意思は
「竈神」に継がれたといいます。

『筑前国の宝満宮③　～竈神　その2～』「竈神その1」ではオキツヒコ・オキツヒメが『竈神（か

まどかみ)』になったお話しました。しかし、「竈神」という言葉はオキツヒコ・オキツヒメがたまわる以前から… ameblo.jp

『カマド』も
「タカマのマド」からきていて
高天原の窓口的な存在だったようです。

しかし、竈神の意義は、いつしか
稲荷信仰に集約されてしまったようです。

「キツネ」が
『キツヲサネ』の方位神を担い

機織りと農業によって
『アミヤシナウ(編み養う)』も担った
からでしょうか？

現在では、
あらゆる神社の境内(北東)に
お稲荷さんが祀られています。

ひとびとの生活を守る存在として、
カダ・ウケモチの思いを
伝える社であるようです。

もし、
ツキヨミがあやまっていなければ、
お稲荷さんのかわりに祀られていたのは
『ツキヨミ(月読尊)』だったのかもしれません。

【月読神社（松尾大社の摂社）】

『ハタレ』の残党が
「乱（みだれ）」をただしたことで

「ハタ」とよばれるようになり

ひとびとに寄りそう存在として
機織りや養蚕をおこなった

というのが

「秦氏」のはじまりではないかと考えます。

応神天皇朝の
はるか以前から流入していて

かれらによって稲荷信仰が生まれ
かれらによって渡来人が活躍する
土壌がつくられていたのではないでしょうか？

ぼくとしては、
ハタレの末裔が
ヤマクイ（大山咋神）であり

ニニキネやウツキネに仕えた

←○『ぼくとしては、
ハタレの末裔が
ヤマクイ（大山咋
神）であり』とする
根拠不明。

重臣だったために

秦氏の祖神として祀られた
とも考えたいところです。

ご覧いただきありがとうございます。